

難民支援プロジェクト

3 誰も“生きがい”や“希望”が必要



ノリアカップの様子
津波難民PK戦にもつれ込め大熱戦



青年センターの建設

4 カマ難民キャンプ支援

2002年2月から約1ヶ月間、日本から4人の青年がケニアの4つの難民キャンプにボランティアに出かけました。今回の目的は2つ。

1つは青年センターの建設。これは難民生活が長期化し、未来に希望を見出す精神的に不安定になりやすい難民の青少年たちにも、生きがいを見つめてもらうというもので、センターでは演劇、歌、数珠教室、スポーツなどさまざまな文化活動が行われます。

もう2つのは、昨年7月、カマ難民キャンプ駐在中に自動車事故で亡くなった故高村明彦さんを追悼するサッカー大会「ノリアカップ」の開催。スポーツをこよなく愛した高村さんは、難民たちにも希望とチャンスを与えたいと、難民に一番近い立場で熱心にプロジェクトに取り組んでいた。そんな高村さんはいつまでも難民の人たちの心に生き続け、愛され続ける存在です。

ノリアカップ

試合当日03月16、17日は両日とも快晴。朝から多量のゲリラ雨が駆けつけた熱い声援を送り続けてくれました。熱情的な応援でゴールを決めた瞬間にグラウンドに乱入する姿も!

試合開始に先立ち、高村さん追悼の黙祷を、抽いたニューフォームを包んだ選手たちの中には裸足の人もありましたがそれまでもみか精一杯のプレーで、過酷な暑さの下、タフにフィールドを駆け回りました。優勝チームには日本から持参したサッカーボールを、優勝チームには1個、そしてMVP選手1人には日本の祭り用ハッピを贈呈し、大会は大成りに終わりました。

5 難民たちの姿

横川 崇 2002年度ワークキャンプ参加ボランティア

乾季だからであろうか、40度近くまで気温が上がり、厳しい日差しが直撃してくる。歩いているだけで猛烈に体力を消耗し、冷たいソダが体に染み入るときが最高に心地いい。ある時は厳しい砂塵が飛び、目を開けるのも辛い。ある時は強い砂塵が飛び、隔週に一度くらいに訪れる突然のスコールが唯一の恵みであるが、それも大地にささやかな安らぎを与えるにすぎない。風土病であるマラリアに罹患することは日常茶飯事であり、マラリアを媒介するハマダマ蚊と格闘しながら共存せざるを得ない。時折、土の中から尻りから登めたサソリが現れ、毒針を人間に向けてくこともある。水と緑が極端に少ない、ひたすら茶色の世界。

カマ難民キャンプはこのような厳しい環境にある。流刑地のような厳しい環境で、人間が生まれた難民の限界を超えているとさえ思える。そこに建てられた難民の家は、地震に襲われれば瞬時に崩壊してしまいそうなど、とりえず雨を防ぐため泥を固めただけといった極めて簡素なものである。わずかな所有物とプライベートと共に間接を過ごしている。食糧の配給も悲しいほど少なく、ひもじきに慣れなければ生き延びていく。このような環境の下、8万人もの難民がそこで暮らしながら生活を強いられている。果して無く広いアメリカ大陸の、だだっ広い大地にばつと取り残された難民たち。抜け出したくても抜け出せない、取り残された難民たち。(中略)

「俺たちには希望がある。だけど、未来に希望を持ってない。」仲良くあった青年が放った言葉である。何時こを抜け出すことができるかわからない若者たちと悲しみが混ざっていた。キャンプ内には、とりえず若さの生命の危険に脅かされている。危険を受けている限り、日々暮らすのには足りず何となく生きている。だが、希望を持ってない苦しみは、食べ物を食べられない苦しみと比べものにならないほどの精神的苦痛を伴うと思う。ただ生きていくだけというのでは人間間的だ。

それでも、絶望感に打ちひしがれて泣きながら毎晩過ごしているような難民には寄り会わなかった。驚くことに難民たちは、そのような悲しみは存在しないのではと思えるくらい楽しかった。(後略)

第10回2002年度古着輸送支援報告

全国からのたくさんのご協力
どうもありがとうございました。

今年は、例年通りのタンザニア・キボンド難民キャンプのケニア難民、エリトリア国内避難民、インドネシアに加え、新しく西アフリカのリベリア国内避難民を支援します。現地からの要請を受けて、避難居住用建設用ビニールシートを日本で購入し、皆様から集められた古着と、墨田区から寄付された乾パン1万食とともにコンテナ輸送しました。政府軍と反政府軍の衝突が激化しているリベリアでは、数万人の国内避難民を生み出しており、食料や避難用住居の設置などの緊急支援が必要とされています。

最終集計：古着6,339箱、乾パン832箱(約2万食)

- タンザニア・キボンド難民キャンプ：40フィートコンテナ4本(古着、乾パン)
- エリトリア：40フィートコンテナ2本(古着)
- リベリア：40フィートコンテナ1本(古着、乾パン、ビニールシート)
- インドネシア：40フィートコンテナ2本(古着)
- 募金額：7,779,741円
- 支出額：6,667,846円
- 差額は難民救済のために使いさせていただきます。



支給を得つたリベリア難民



スマトラ、タルトゥッパに届けたいコンテナ左様が、わがわがプロジェクト事務局 兼宇野自宅

カンボジア学校建設プロジェクト

1 学校にいかせることができるようになり嬉しい!



新しい学校で学びはじめた子供たち



完成した学校 2002年秋に開校



ワークをはじめる前に村ごとにも後ろの建物以前の学校

It's around! (明日もあるよ)

宮本 新 わがわがプロジェクト
日本難民センターの教育係

私たちの小学校建設支援プロジェクトの特徴は、村人たちの自発性、自主性を第一に尊重している点です。村人自身が教育の大切さや必要性を感じ、建設には村全体が参加します。舗装道路や病院もないこの村には、こどもに学校教育を受けさせたいという強い希望があります。

今回私たちがしたのは校舎の基礎工事。まずは敷地を鎮で掘り起こし、切り株や岩などを取り除きます。そして土を柱となる1平方メートル、深さ170センチほどの穴を掘ります。その数15本あまり。その一方で掘り出した土を振るいにかけて、川砂と混ぜ、そして土をこね合わせてブロックを作成します。気の遠くなる思いで、ここまではすべて手作業で行っていました。「シベルカーやブルドーザーがあれば一日で終わるのに...」という嘆きを余所に、

普段持ち回れるい紙やコップを手にも、汗に汗を流す作業を続ける参加者たち。村の人たちは顔を見ても、「疲れたらどう、休め、休め」と言い、「It's around! (明日もあるよ)」と。

村の人たちは学校建設を楽しんでいました。村の職人さんも、農作業の合間に手伝ってくれる人も、学校作り子ども達も。時間ができれば訪れ、疲れたら休み、友達が来たら談笑し、日が暮れたら家に帰る。ことさらに急ぐことを良しとする考えが私の中にもある。が、それこそカンボジアの人たちにとって不思議な光景かもしれません。時間には追いつけない日常を過ごす者にとって、「It's around!」とは、今をもっと大切にという言葉として響いたのです。

私たちはいつもハッピー

中村 実花子 キャンプ参加ボランティア

すぐまた忙しい日々に戻り、2週間たった今、よやくこのレポートを書いている。2週間という、私がカンボジアで過ごした時間と同じ。ちょっと信じられない。

プノンペンの空港をあとにするとき、2週間前と同じこの空港を降り立ったときのことを思い出して、2年前のこのようだった。それだけ1日目に重みがあった。「勝たないよ」とか「また来たよ」という気持ちは、カンボジアを飛び出す時までは正直あきらまなかったし、日本に帰るときにはあったが、今振り返ると、たまたま愛しく感じている。とてもいい匂い「のする空間」だ。日本は物質的に恵まれている。私たちの滞在した村にはそれが無い。けれども私たちが来た村には、そこには笑顔で握手を返してくれた。その姿に、ストリートレベルの絵に、村の子供たちの溜みきった瞳に、私はこの国の未来の光を見た。

「私たちはいつもハッピー」

果たして日本の何人か同じ質問をされたとき、こう即答できるだろうか。「いつも」かもう一度、カンボジアの地に立ちたい。今ではこう思っている。そしてなぜこの先再びの地に訪れる自分を、負いわず確信している。

2週間の間、色々な場所へ行き、いろんな人とも出会い、会話をしたけど、私はまだ「カンボジアの素顔」のほんの一部しか知らずに帰ってきたように思う。それでも、旅がもう少し折り返し地点に来た頃訪れたシェムリアップにある地雷博物館の話は、カンボジアの核に近づくと大きな一歩となり、衝撃的だった。

「本当は今一番必要なのは、内戦で傷ついたカンボジア人たちの心のケア」博物館を守る日本人青年(ほんの数ヶ月前、ここで働くためにこの国にやってきました!)の言葉は深くみな心に刻み込まれた。彼

はこう言った。

「どんなに海外からのボランティアがやって来てても、この国の人々自身が立ち上がるようになければ真の復興はありえない。」この話を聞いてから残りの1週間は前半とは違う目で色々なものを見ることができた。

最終日、数人の仲間とプノンペンにあるストリートレベルの賑わいあるカフェに足を運んだ。そこには彼らが描いた数枚の絵が飾られていた。その大胆な想像力、力強いタッチ、斬新な色づかいに、私は心をバーンさせたよな印象があった。

その前日、村を飛び出し、私の人々に、「私はあなた方を大好したい。手助かりたい。」でもこの国はあなたの国です。あなた方が自分たちがあらうと頑張ってください。」と伝えた。内心ドキドキしながら、村人を見ていたが、彼らは瞳をキラキラさせ、その姿に笑顔で握手を返してくれた。その姿に、ストリートレベルの絵に、村の子供たちの溜みきった瞳に、私はこの国の未来の光を見た。

2003年春も学校建設を支援します!

現地からの強い要請を受け、今度は3つの校舎を建設する予定です。バタマン省パベルカリン郡、コンボンチウ省サマキスルニェイ郡、コンボンチウ省プノムスレー郡にそれぞれ1校舎ずつと井戸・トイレを建設することで、合計1,049人の児童が初等教育を受けられるようになります。長期にわたる内戦を経たカンボジアの復興支援に長期的貢献を果たすものと期待されています。



2002年ワークキャンプ参加者